文化

サチ（幸）の民俗学

海幸彦と山幸彦の話から

なら民俗通信 260

西村　博美

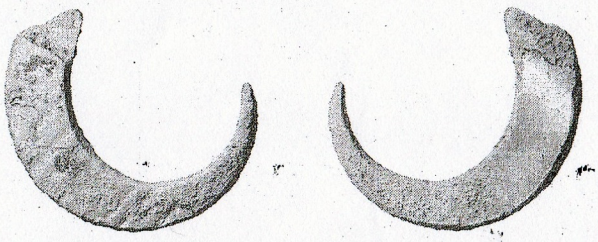
釣り針に宿る神の呪力

▼沖縄の釣り針

『民俗伝承』という古い雑誌を読んでいたら、三重県の久保啓三という人が「志摩浜島の漁業民俗」と題して、書いているのに目が止まった。

「沖でサイやろかサイ呉れといふのはおかずの事である。之はシャチワケであって幸の意に通ずる。それで漁師は気が大きいといはれる」（第十一巻第六・七号、一九四七年）。

ところで、つい最近のことだが、沖縄の洞窟（くつ）で「世界最古の釣り針」が見つかったという（沖縄県南城市、サキタリ洞遺跡）。そのような、「釣り針」が「サイ／サチ（幸）」と「シャチワケ」に、どんなふうにつながっていくのか、先学の知恵をお借りして、しばらく考えてみようと思う。



サキタリ洞遺跡出土釣り針（沖縄県立博物館・美術館提供）

▼海幸彦と山幸彦

わたしたちは、「海幸彦と山幸彦」のはなしを、父母や祖父母の昔語りや絵本のなかで、何度も耳にして育ってきたし、実はこの神話が『古事記』や『日本書紀』から採られていることも、よく知られるところである。

池澤夏樹の訳になる『古事記』から最初のところを読んでみよう。

「ある時、ホヲリ（山幸彦）が兄のホデリ（海幸彦）に向かって言うには――『お互いに道具を取り替えてみましょう』と言った。だが三度言っても聞いてもらえなかった。それでも最後にはようやく取り替えてもらった。そこでホヲリは釣り道具を持って海へ行ったが、魚は一匹も釣れないばかりか釣り針まで海でなくしてしまった」（池澤編『日本文学全集』第一巻、河出書房新社）。

この話は、まだ先へ続いて、思わぬ展開をみるのだが…。

▼サチ（幸）とは何か

海幸彦・山幸彦の話は「さちの信仰」があって生まれたものだと折口信夫は語っている。幸魂（「サチ」という「タマシイ（魂）」）は、山海の漁猟を自由にする威力を与えるものである。二人は、そのサチを授かっているにもかかわらず、いわば「さちの貯蔵所／宿り場」ともいうべき「鉤（はり）」を交換してしまったから失敗をしたのだ（折口信夫「剣と玉」／「原始信仰」）。

三浦佑之もまた「海の幸を釣るための道具である釣り針は、海の神の呪力に支えられて海の幸を釣ることができる」（三浦佑之『神話と歴史』、若草書房）と、釣り針に宿る神の「呪力」について触れている。

▼「シャチ」ということは、大和の民俗に詳しいが、奈良県吉野郡の猟師仲間では、この最後の玉を「イノリダマ・ナムアミダブツノタマ」などと呼んでいるとしている（「幸の神」『神々の世界』、桜楓社）。

冒頭に引用した久保が記す「シャチワケ」の「シャチ」もまた、「サチ（幸）」の語の転じたもので、すなわち「幸いを分け与える」という意味ではないかと思われる。

▼説話の拡がり

海幸彦と山幸彦によく似た話は、世界に広く分布していることは[illegible]ている。ドイツの[illegible]者レオ・フロベニ[illegible]よれば、東南イン[illegible]アのケイ諸島やセ[illegible]島のミナハッサ、[illegible]ミクロネシアのパ[illegible]島にも残っている[illegible]（北見俊夫『日本[illegible]系』第六巻、小学[illegible]

また、歴史学者[illegible]正昭はこの物語を[illegible]て、海辺を遊幸す[illegible]の世界は、隼人（[illegible]系の神話に、潮の[illegible]ずみずしく息づい[illegible]のだと述べている[illegible]本神話』、岩波新[illegible]

「ホヲリは（海[illegible]ある）ワタツミに[illegible]た兄の釣り針のこ[illegible]した。（略）鯛の口[illegible]べてみると果たして[illegible]針があった」（池澤[illegible]掲書）。

海の神は、洋上の[illegible]か彼方から寄り着く[illegible]海幸彦に「サチ」を[illegible]恵みをもたらした。[illegible]に見つかったという[illegible]な釣り針もまた、[illegible]人が夢みた故郷の[illegible]海の世界へと、わ[illegible]ちを連れて行って[illegible]る。

（詩人、奈良民[illegible]研究所研究員）